

～エコロジー系考古学＝「石と森と星の学校」～

平成26年地域政策研究センター(教員提案型・後期) 採択課題

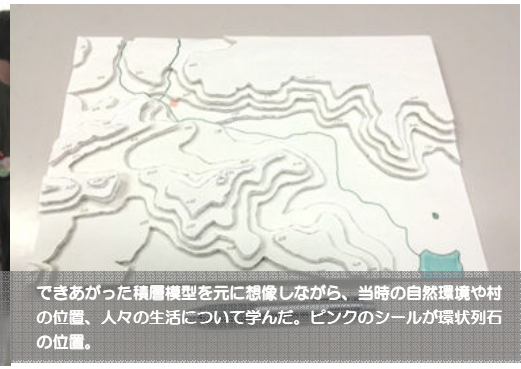
課題名：史跡公園「湯舟沢環状列石」の親子参加による植生景観修復と博物館体験の分析
研究代表者：総合政策学部 教授 平塚 明
研究メンバー：桐生正一(滝沢市埋蔵文化財センター*) *実施当時
技術キーワード：プロジェクト・ワイルド、積層模型、景観修復、圧痕分析



アイスブレイク。生態系についてネイチャーゲーム(プロジェクト・ワイルド)で学ぶ。ジオラマ作り。



環状列石が造られた縄文時代の地形を積層模型で再現した。等高線図に基づきスチレンペーパーを電熱カッターで切り抜き、スプレー糊で貼り付けながら積み重ねた。



できあがった積層模型を元に想像しながら、当時の自然環境や村の位置、人々の生活について学んだ。ピンクのシールが環状列石の位置。

▼研究の概要(背景・目標)

滝沢市埋蔵文化財センターの利用者は他の考古学系博物館同様、熱心なリピーターである高齢者に著しく偏っている。小学生および成人の入館者を増やすとともに、一人一人の博物館体験を深めることが本研究の課題である。

▼研究の内容(方法・経過)

内容に連続性を持たせたワークショップ(テーマは「景観」)を7回開催し、親子のリピーターを養成しながら、博物館体験について詳細なインタビューをおこない、分析した。ここに写真を掲載した内容のほかに、縄文バスツアー(一戸町御所野縄文博物館、鹿角市大湯ストーンサークル、青森市三内丸山遺跡)、講話(岡村道雄 奥松島縄文村歴史資料館名誉館長)と修了式をおこなった。なお、ワークショップの冒頭では毎回、アイスブレイクとしてネイチャーゲームをおこない、環境教育への導入とした。



春分の日(2015年3月21日)。コンピュータ・シミュレーションによって再現した縄文時代の春分の日の日没と夜空を見た後、環状列石から見える谷地山への日没をみんなで眺めた。



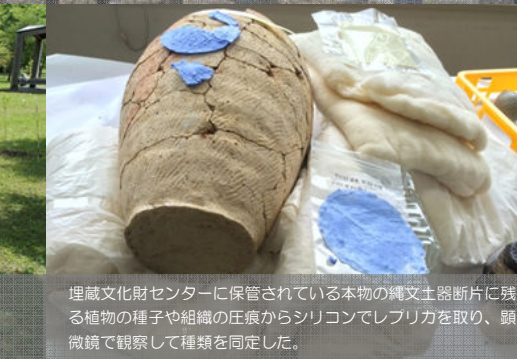
谷地山への眺望を阻害していた樹木(クヌギ)を石斧で伐採した。指導は山田昌久教授(首都大学東京)。



全員が交代で石斧を振り、2時間半以上かけて伐り倒した。



縄文人が利用していたと推測される樹種を史跡敷地内に植えた。景観を乱す外部の要素を見えないようにする修復作業でもある。



埋蔵文化財センターに保管されている本物の縄文土器断片に残る植物の種子や組織の圧痕からシリコンでレプリカを取り、顕微鏡で観察して種類を同定した。



埋蔵文化財センターに保管されている本物の縄文土器断片に残る植物の種子や組織の圧痕からシリコンでレプリカを取り、顕微鏡で観察して種類を同定した。

▼研究の成果(結論・考察)

参加者で多かったのは「母・子」の組み合わせであった(13組のうち12組は母親もしくは祖母の参加)。1回でも父親の参加があったのは3組であった。男性(父親)は自分の興味を高めるために、女性(母親)は子どもの興味を広げるために博物館を利用する傾向が強かった。

▼おわりに(まとめ・今後の展開)

幼少期に博物館へ行ったことがある人は長じてからも博物館に行く傾向があった。とくに幼少期、博物館に好印象を抱いた人にその傾向が強かった。したがって博物館としては、親子連れの入館者を想定して企画することが重要だろう。子が親となり、今度は自分の子どもを連れて来るような好循環が期待される。また、子どものために、あるいは子に引っ張られて来館した親が、成人としての目で展示や内容の新しい魅力を発見する場合もあることが、アンケートやインタビューから明らかになった。